

「アワビの畑」漁村の救世主に！ 石原義剛

いま鳥羽市では、アワビを増やすために、本格的な事業が始められようとしている。私はこの事業を勝手に「アワビ畑づくりプロジェクト」と呼んでいる。

志摩半島で年産45トンまで激減したアワビを、過去の平均年産200トンまで回復しようという計画の実施だ。

現在70歳過ぎの海女なら「沖で休もうと、岩の上へ足を下ろしたら、岩がもぞもぞ動くんや。アワビやったわ」と誰もがいう。5, 60年以上前の話である。その当時はそれくらいたくさんのアワビが磯場にいたのだ。

ここ10数年、志摩半島で海女が漁獲するアワビが急減している。大きくは乱獲のせいである。10年くらいの禁漁をしない限り、もう人が手助けせずにアワビの資源回復はないと思われている。

アワビ資源の減少が懸念されだした昭和50年代から、稚アワビの放流事業は県・市・漁協の事業として行われて来ている。しかしそのサイズが3センチにも満たない小さな稚アワビだったので、結果はタコや魚やヒトデに食われる餌になったので、おとなに成長して残るのは2~3%もなかった。最近調査でやっと5センチまで育てて放流すれば20~30%が成貝になることが分かった。そこまで人工で育てる方法を「中間育成」という。

中間育成で5センチにして磯に放す。

志摩半島の磯にはアラメなどアワビの餌になる“海の森”海中林が健全に広がり「アワビ畑」の肥料になる。

これまでの放流事業は真剣さに欠けていた。アワビを取る海女自らの参加もなかったし、船上からばら撒くことさえあった。資源への関心は薄かった。

アワビ生産の回復は海女の後継者をも増やすし、漁村の救世主となるだろう。